

パリエアショーから中国航空工業の問題点をさぐる

漢和防務評論 20131127(抄訳)

平可夫

阿部信行

(訳者コメント)

漢和防務評論の平可夫氏は、2013 年のパリエアショーにおいて展示された中国機を見て、中国航空工業の問題点を指摘しました。その記事（20131127）を紹介します。

中国航空工業の問題点の第 1 は、有力なエンジンが無いことから、米露並みの総合的に優れた先進型戦闘機が開発できないこと。

第 2 は、共同開発に応じる国が見当たらないこと。したがって新型機開発に膨大な資金が必要になること。

第 3 は、中国の外交政策が周辺国に敵対的であり、良い戦闘機が出来ても政治的に買ってくれる国が少ないこと。等々です。

長文ですが、興味のある方はお読みください。

2013 年のパリエアショーにおいて、中国航空工業は、どのようなモデルの戦闘機を展示したのだろうか？ここで述べているのは言うまでもなく、模型或いは試作機そのものを指している。中国の第 3 世代機は、L-15 型高等練習機のほかは、パリエアショーに展示されなかった。そこに普通と違う状況が出現している。すなわち、中国空軍は、国産の第 3 世代戦闘機を大量に装備する一方で、輸出に回す第 3 世代戦闘機が 1 機種も無い。これは国際航空界では極めて少ない現象である。

ある国が第 3 世代戦闘機或いは新時代戦闘機の生産を開始した場合、同時にこの種戦闘機の海外輸出を開始するのが普通だ。F-22 や初期の SU-15 を除けば、米国やロシアの航空史上には無かった現象である。F-22、SU-15 は防衛政策上の制約があり、外国に秘密を知られないためであった。その他の例外として日本の F-2 があるが、日本には“武器禁輸 3 原則”があり輸出が出来なかった。戦闘機の生産機数が国内向けだけならば、航空機の単価は高騰する。

冷戦後のフランス、米国、ロシアの軍事航空工業の発展を見ると、新時代の戦闘機の生産が開始されると、同時に海外輸出が図られている。この点はロシアが特に顕著である。ロシアの M.POGOSYAN 総裁は、T-50 型第 5 世代戦闘機（西側では第 4 世代）の試験飛行段階においてすでに積極的に海外市場を模索していた。ソ連崩壊後、ロシアは経済困難に直面したため SU-30MK/MK2/MKI シ

リーズ戦闘機を自国よりも先に海外に売ろうとした。フランスは、ラファール戦闘機をインド、UAE、マレーシアに積極的に売り込んだ。

F-35 戦闘機も同様だ。開発の危険度を下げるため、最初から多国間で開発に取り組んでいる。これは輸出対象国が増えるので有利だ。全体的に見て、今後の第 5 世代戦闘機は、多国間で開発、多国間で装備する方向に進むであろう。

中国が生産した多くの第 3 世代戦闘機は、なぜ輸出しないのであろうか？問題の中味は複雑である。中国が第 3 世代戦闘機を輸出できない理由は、中国の第 2 世代及び第 2 世代半戦闘機の輸出先が第 3 世界の貧乏国に限定され、技術レベルが低かったからである。今まで、中国が自力生産した J-11B、J-15、J-16、J-10A/B、J-20、J-31（暫定名称）戦闘機を第 3 及び第 4 世代戦闘機として見ると、生産した戦闘機の種類はロシアよりも多い。しかしなぜ航空機が輸出できないのか？或いは輸出する準備をしないのか？

J-31 及び J-10 について興味深い話がある。中国国内のエアショーにおいて、J-10 の模型は何度も展示され、説明図まで印刷されたが、如何なるデータも記載されなかった。一方 J-10 の模型は外国のエアショーに展示されたことはなかった。J-31 は、2012 年の珠海エアショーで模型が展示された。2013 年のパリエアショーでは、KDR の記者がなぜ J-31 を展示しないのか質問した。中国の説明者は、KDR を批判して次のように述べた。”目を開いてよく見よ”と。さがしてみると、J-31 は、壁の上に蜃気楼に映った蝶のようにぼんやりと見えた。

第一、第 3 世代戦闘機市場を見まわしてみると、巨大である。特に第 3 世代++戦闘機には 2 種類の改良型戦闘機がある。たとえば F-18F/E、ラファール、SU-30MKI、SU-30MKK(2)、SU-35、欧州のタイフーン戦闘機である。これらの戦闘機はそれぞれ伝統的市場があり、いずれも双発機である。これらのことから、各国の総合国力が上昇を始めたために双発戦闘機が輸出の主流となったと言える。この点を KDR は 10 年前から予想していた。たとえばエチオピア及びウガンダも SU-27SK 及び SU-30MK2 を輸入した。ベトナム、インドネシア、マレーシアも SU-30MKI 及び MK の市場となった。

F-15++、F-18E/F シリーズ戦闘機は、自ずと米国の同盟国によって継続使用されよう。F-15 はすでに韓国やシンガポールのような過去の航空小国にも導入された。SU-30MKI 戦闘機については、ロシアは 42 機の新たな販路を取得した。インドへの輸出である。このほかアルジェリア空軍及びベネズエラ空軍もユー

ザーである。

現在エジプト、ブラジル、マレーシア、ベトナム、UAE、インド、韓国、日本が先進型双発戦闘機の輸入を検討している。欧州の先進国は全て欧州タイフーン、F-35、SAAB グリペン戦闘機の縄張りとなっている。

単発戦闘機市場も依然として存在する。しかし次第に小さくなっている。代表的機種は、グリペン、及び F-16E/F である。後者は UAE だけが装備している。グリペンは、アジアではタイ国が装備している。この機体は確かに価格が安く質が高い第 3 世代戦闘機である。

今後アフリカ州、南米国家は、引き続き F-16 シリーズ、及びグリペン戦闘機を輸入する可能性がある。チリ、パキスタンは F-16 BLOCK52 の使用国である。

結論を述べると、単発戦闘機の市場は縮小しつつあるが、依然として潜在力を有している。双発戦闘機の市場は、広がっている。特に F-15 の大改修型と SU-35 は将来激烈な競争相手となるであろう。後者は、中国、ベネズエラ、カダフィー時代のリビア等、市場を拡大しつつある。前者は、サウジアラビアに導入され、日本などその他の同盟国に輸出される可能性もある。

中国は、何故 J-10 を輸出しないのだろうか？

以下、中国製戦闘機が輸出できない理由を述べる。

1. エンジンが輸入品であること。戦闘機売り込みの国際競争が厳しいことから、WS-10A 型中国製エンジンを搭載した J-10 を輸出できるようになるまでには、相当の期間が必要である。現在明確に興味を示している国家はパキスタンであり、同型機をパキスタン国内では FC-20 型戦闘機と命名している。しかしこの事業はパキスタンの資金不足のため、延び延びになっている。また AL-31F エンジンを搭載して輸出するにはロシアの承認が必要である。

2. 現在中国空・海軍は、戦闘機の更新時期に当たり、生産ラインがフル稼働状態のため、J-10A の輸出に多少制限を受ける。

3. 上述のごとく、現在国際市場で求められる戦闘機は、双発、多用途であり、購入国は入札段階において指標を設定している。例えばインドの 126 機の中型多用途戦闘機、オーストラリア空軍の F-18E 換装計画、サウジアラビア空軍の

F-15 等である。

4. 多用途戦闘機である J-11、J-15、J-16 は、全てロシア戦闘機のコピーである色彩が強く、輸出する場合、ロシアはエンジンを提供しない。この点は明確である。中国の航空工業は、最初から国内市場に限定してこれらの戦闘機を生産してきた。したがって中国航空工業は、自ら生産した第 3 世代戦闘機を輸出することなど考えたこともなく、自国を第 3 世代戦闘機の輸入市場と自認していた。

5. もし輸出が必要ならば、現在なぜ積極的に推奨しないのであろうか？その理由は、戦闘機の位置づけが曖昧であること、資金が乏しいこと、信頼できるエンジンが無いこと等である。たとえ、共同開発の道を探ったとしても、現在までに唯一成功した事例は、パキスタンとで共同開発した JF-17 だけである。J-31 は、JF-17 のように共同開発が可能であらうか？結論を出すのは未だ早過ぎる。優れた第 5 世代戦闘機を開発するためには、膨大な投資が必要であり、パキスタンの現在の財力では無理である。一航空機製造会社で決められる問題ではない。瀋陽航空機会社が自力開発し、投資した J-31 戦闘機に対し、中国空軍は購入意向が無いことが分かっている。この点は FC-1 型戦闘機と同じである。

6. 戦闘機の輸出入は、性能だけで決定されるのではなく、ほとんど政治的に決定される。中国の SU-35 購入、韓国の F-15K 購入、インドのラファール購入は、全て政治的に決定された。特に地縁政治、武器拡散、技術移転等の要素が強く反映する。これらの要素が中国戦闘機の輸出を左右している。中国は四面楚歌の外交政策を採っているので、たとえ J-10A の性能が良くてもベトナム、インド、フィリピン、台湾、日本、韓国、NATO 等の国家が購入するはずがない。したがって戦闘機の輸出を見ると、その国の置かれた国際的な立場がよく分かる。

7. もし中国の第 3 世代戦闘機の市場が皆無ならば、J-20 輸出の将来展望は楽観できない。現段階では戦闘機としての位置づけに問題がある。超音速巡航ができない J-20 は、何世代に相当する戦闘機なのだろうか？ロシアの T-50 や米国の F-22 のような全体性能が発揮できない場合、同じ条件下では、ロシア、インドの T-50 が技術的に優れ輸出する上で優勢であることは間違いない。

一方楽観的な一面もある。双発の第 3 世代高等練習機の輸出が実現したことである。ジンバブエが中国の L-15 高等練習機のユーザーになったが、この点は重

要だ。現在第 3 世代高等練習機の市場争奪戦は相当激烈である。アルジェリアは YAK-130、インドネシアは T-50、UAE が輸入する可能性があるのはイタリアの M246 である。まさに混戦となっている。

双発の第 3 世代高等練習機が国際市場に定着し、ある国家が L-15 を使用したならば、その国は中国の次世代双発戦闘機、特に J-31 を採用する可能性がある。現在第 3 世代高等練習機を求めている国家は相当多い。エジプト、北アフリカ、東南アジア、中欧、元 CIS 共同体国家、米国、及び NATO は、自ら第 3 世代高等練習機を求めている。したがって最も競争力のある代表的な機種は、T-50、YAK-130、欧州の M246 及び L-15 である。

ロシアは、ロシア製第 3 世代戦闘機を使用している国家の高等練習機市場が上述国家に侵略されるのを憂慮はしていない。なぜならロシア製第 3 世代戦闘機を輸入すると当然 YAK-130 が必要になるからである。アルジェリアがその典型である。ベトナムは YAK-130 の輸入を交渉中である。

高等練習機市場を見誤ったと見られているのはインドネシアである。インドネシアは、韓国から 12 機の T-50 を購入する契約を結んだ。しかしインドネシア空軍が使用するのは SU-30MK、SU-27SM 系列の双発戦闘機である。ここに一種の趨勢を見ることが出来る。すなわち高等練習機市場は、一定の独立性を持っている可能性があることだ。なぜならば高等練習機使用国は高等練習機の多用途化を求め、攻撃機に充てようとしている。この趨勢は以前からあった。

以上